

香取本『大江山絵詞』の「平野山」と「近江国かが山」

— 比叡山延暦寺による土地領有権説話としての酒吞童子譚 —

WisdomMingle.com

倉田 幸暢

はじめに

本稿では、香取本『大江山絵詞』(以下、『大江山絵詞』と略記)の絵巻物に記されている、「^{ひらのやま}平野山」という地名と、「^{おうみのくに}近江国 ^{やま}かが山」という地名について、下記の仮説を述べます。

- ・仮説 1 『大江山絵詞』における「^{ひらのやま}平野山」とは、「比良山地・比叡山地・^{いしやま いしやま}石山(石山寺)の「^{ひらみょうじん}酒天童子はその一帯の地主神である比良明神としてあつかわれている。
- ・仮説 2 『大江山絵詞』における「^{おうみのくに}近江国 ^{やま}かが山」とは、^{こだかみやま}己高山のことである。
- ・仮説 3 天台教団は、自分たちが「^{ひらのやま}平野山」と「^{おうみのくに}近江国 ^{やま}かが山」の土地を領有する正当な権利をもっている、ということを主張するための根拠として利用するために、『大江山絵詞』のなかに「^{ひらのやま}平野山」と「^{おうみのくに}近江国 ^{やま}かが山」という言葉をさし入れた。

(※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。 <https://wisdommingle.com/?p=21616>)

酒天童子の昔語りのなかの「平野山」と「近江国かが山」

現在、逸翁美術館に所蔵されている『大江山絵詞』の絵巻物は、現存最古の酒吞童子説話をつたえています。その『大江山絵詞』のなかに、酒天童子が自らの来歴を語る場面があります。その場面では、かつて、酒天童子が、住みかであった「^{ひらのやま}平野山」を最澄に奪われ、そのあと、最澄からあたえられた「^{おうみのくに}近江国 ^{やま}かが山」(近江国かゝ山(近江国かか山))に移住したものの、桓武天皇によってその土地からも追い出されてしまった、ということが語られます。下記の文章は、その経緯についての、酒天童子による昔語りの一節です。

古^{いにしえ}はよな、^{ひらのやま}平野山を^{じゅうだい}重代の^{しりょう}私領として^{まか}罷り過ぎしを、^{でんぎょうだいし}伝教大師といひし^{ふしぎ}不思議の^{ぼう}房が此^この山を^{てん}点じ取りて、〔中略〕、心は^{たけ}猛く思へども^{ちから}力及ばず、^{あら}現はれ出でて、
「然^{しか}らば、^{いどころ}居所を^{たま}与へ^{うれ}給へ」と愁^{うれ}ひ申^{もう}せしに依^よて、^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山、^{だいしぼう}大師房が^{りょう}領なりしを得たりしかば、^{しか}然らばとて^か彼の山に住み替えてありし^{ほど}程に、^{かんむ}桓武天皇、又^{ちやくし}勅使を立て^{せんじ}宣旨を読まれしかば、^{おうど}主土にありながら、^{ちやくめい}勅命さすがに^{そむ}背き難^{がた}かりし^{うえ}上、^{てんしきた}天使来りて^{いだ}追ひ出^{ちから}せしかば、^{また}力無^{また}くして又、此^この山を迷ひ出でて、〔後略〕

『大江山絵詞』の説話への比叡山延暦寺の影響

『大江山絵詞』の説話に、比叡山延暦寺の影響があらわれていることは、これまでに、牧野和夫さんや、菊地勇次郎さん、天野文雄さん、濱中修さん、岩崎武夫さんなどの、たくさんの研究者の方々が指摘されています。

菊地勇次郎さんは、『大江山絵詞』のなかで、酒天童子が最澄について言及する場面には、「最澄への讃詞」があり、また、最澄に対する「桓武天皇の外護が強調され」、「最澄の法力が讃えられ」ている(菊地, 1980, pp. 362-363)として、さらに、

「大江山絵詞」の物語は、御堂入道大相国の子息の失喪から始まるが、その子息は、良源、または円仁の弟子で、法華経読誦の功德によって、“大江山”の牢中でも、法華経の陀羅尼品に説く十二羅刹女、師の良源が修した七仏薬師法の本尊薬師如来に属し、行者を守る十二神将、それに日吉の使者猿と本地の不動の姿であらわれた早尾権現の加護をうけ、頼光たちも、若僧に変身した日吉に助けられたとし、天台の神仏に守られた最澄・頼光と眷属の鬼や変化を駆使する酒吞童子との対決として語られ、前者の勝に終る(菊地, 1980, p. 363)

と述べたうえで、これらのことから、「この物語の作者の背景に、天台教団があるのを予想するのも可能であろう」(菊地, 1980, p. 363)と述べておられます。

牧野和夫さんは、つぎのように述べておられます。

酒天童子譚は、童子の経歴の独白部分に叡山開闢話がとり込まれる(菊池勇次郎氏・天野文雄氏の指摘)ばかりではなく、酒天童子譚の叙述展開そのものが叡山開闢譚(即ち、天台山開闢譚であり、金毘羅・提婆の活躍する霊鷲山釈迦説法譚)をなぞるものでもあったのである。(牧野, 1988, pp. 61-62)

また、牧野さんは、中世の聖徳太子伝のなかに、「聖徳太子の生まれ変わりである最澄が太古の昔から比叡山に住んでいた地主の悪鬼を追い払った」という伝承をつたえるものがあると述べておられます(牧野, 1990, pp. 92-94)。(その伝承とは、醍醐寺蔵『聖徳太子伝記』の「太子卅二歳御時」の項目に記されている伝承のことです(『中世聖徳太子伝集成 第2巻』, pp. 451-453)。)

謡曲「大江山」は、諸本のなかでも、『大江山絵詞』と同系統に属し、話の内容もよく似ています。その謡曲「大江山」のなかの酒天童子の昔語りの場面について、天野文雄さんは、つぎのように述べておられます。

この話は、酒天童子の物語ではあくまでも童子の追放譚だが、裏返しにみるなら叡山開闢説話であること論を俟たない。後代の伝本には殆んど継承されなかったものの、唯一「伊吹童子」系の物語に、この話が趣向を変えながら息づいていることを知るならば、酒天童子と叡山・最澄との関連は思いのほか根深いものがあると思わずにはいられない。“しゅてん童子”なる鬼神的存在を解明するのに、この童子追放譚すなわち叡山開闢説話を足がかりにすることは十分な理由があるのだ。

〔中略〕

叡山開闢説話は新来の仏教が地主神に代わって比叡山の新しい主になった事件を鮮やかに照らし出していると言えよう。(天野, 1979, pp. 20-21)

岩崎武夫さんは、つぎのように述べておられます。

叡山を伝教に追われ、弘法大師に法力によって閉じ籠められながら、大江山に居つくようになったという酒吞童子籠居のいわれは、いわゆる叡山の古い地主神が、今来の神によって追放される過程をあらわしており、童子はその地主神のなれの果てということになる。(岩崎, 1978, p. 114)

濱中修さんは、「酒吞童子の大江山止住以前の幼年期を物語」っている『伊吹童子』という文献をとりあげて、つぎのように述べておられます。なお、『伊吹童子』の物語のなかでは、酒吞童子という呼称は、伊吹童子のあだ名だとされています。

中世における比叡山の開闢説話の中に後の香取本系に繋がるような話柄も見出すことも出来るのである。〔中略〕最澄は地主神より叡山を譲り受けたということであり、その表象として霊木が語られているのである。(濱中, 1990, p. 55)

物語の真の意図は、叡山を支配していた邪悪なる在地の神を調伏し、これより叡山の支配権を天台教団が正当に譲渡されたということと、「怪物退治」の物語の中に仕組むことにあった筈である。〔中略〕香取本系の酒吞童子にしても、また『伊吹童子』にしても、叡山の周辺で編まれたことは容易に推測され、王権の讃美は即ちその王権を支える仏法、殊に天台仏教の讃美に収斂されることは言うまでもなかろう。(濱中, 1990, p.59)

このように、たくさんの研究者の方々が指摘されているように、『大江山絵詞』の説話には、比叡山延暦寺の影響があらわれています。この比叡山延暦寺の影響は、「平野山」と「近江国 ^{ひらのやま} かが山 ^{おうみのくに}」についてかんがえるうえでも重要です。なぜなら、「平野山」と「近江国かが山」は、どちらも、比叡山延暦寺が、自宗の土地領有権を主張するという目的のために、『大江山絵詞』の説話のなかに挿入した要素であるとかんがえられるからです。以降では、そのことについてお話していきます。

「平野山」が「比良山」のことである根拠

『大江山絵詞』の酒天童子の昔語りのなかでは、「最澄が^{ひらのやま}平野山の土地を酒天童子から奪い
とって、その地に根本中堂を建てた」とされています。この「^{ひらのやま}平野山」という地名は、おそらく、「ひら
のやま」(「比良の山」)、つまり、現在で言うところの「^{ひらさん}比良山」(「^{ひらさんち}比良山地」)のことを指しているの
だろうとおもます。

「^{ひらのやま}平野山」という言葉は、「^{ひらさん}比良山」のことを意味している」という主張の根拠として、牧野和夫さん
が、中世の聖徳太子伝と天狗説話との関係について述べておられる、下記の記述を紹介したいと
おもいます。

『是害房絵巻』に配された平山(比良山)の大天狗は、その来歴を「昔、守屋大臣ノ破法
ノ時、其罪ニヒカレテ此道ニ入テ」と語り、且つ又、『比良山古人霊託』においても、「我是
聖徳太子之御時者」と語るのである。〔中略〕比良山(平山、平野山とも)の天狗「天魔・
鬼・紺青鬼とも」は、「聖徳太子伝」に緊密な関わりをもっていたのである。

〔中略〕

天台を中心にして聖徳太子と同種姓にして一如ともいうべき平山(比良山)の青鬼・天
狗が“楠”に現じて行動・予言し、一方では楠木正成、変じて化物となる。(牧野, 1993, pp.
247-249)

上記の記述にあるように、「平野山」あるいは「平山」という言葉は、「比良山」のことを指す言葉
であるようです。また、もうひとつの根拠として、『比良山古人霊託』のなかにでてくる「比良山」(ひ
らのやま)という言葉に対して、木下資一さんがつけておられる下記の注釈を紹介したいとおも
います。

滋賀県の琵琶湖の西岸に連なる大山地。京都の東北方に聳える。平山、比羅山とも。
修験の道場として知られ、比叡・愛宕等とならぶ七高山の一(二中歴)。(木下, 1993, p.
457)

上記の注釈にあるように、「比良山」(ひらのやま)という言葉は、「平山」と表記されることもあつた
ようです。このことも、「平野山」あるいは「平山」という言葉が、「比良山」(ひらのやま)のことを指
す言葉であるとかんがえる根拠のひとつです。

「平野山」が比良山地・比叡山地・石山の一带の地域である根

拠

最澄は、「平野山」(比良山)の土地を酒天童子から奪いとって、その地に根本中堂を建てたとされています。ですが、実際には、最澄が根本中堂を建てたのは、比叡山です。比良山地と、比良山地の南に流れる和邇川をはさんで、さらにその南にある比叡山地は、近い位置にあります。ですが、比良山地と比叡山地は、下記のように、明確に区別することができる、まったく別の山地です。

・比良山地: 主峰の武奈ヶ岳や、蓬莱山、打見山、白滝山、権現山、堂満岳などを含む山地。
(『日本歴史地名大系 第25巻』, p. 53)

・比叡山地: 主峰の 大比叡 や、四明岳、小比叡 (別称: 波母山・横高山・釈迦岳)、水井山、三石岳などを含む山地。(『日本歴史地名大系 第25巻』, p. 25) (コトバンク, 「比叡山(ひえいざん)とは」, 2019年6月11日閲覧)

ここで、「なぜ、『大江山絵詞』では、最澄が根本中堂を建てた山のことを指す地名として、『比叡山』という地名ではなく、『平野山』という地名をつかっているのか？」という疑問が湧いてきます。結論から言うと、おそらく、この「平野山」という言葉は、「比良山地をはじめとして、その南にある比叡山地や、さらにその南にある 石山 (石山寺) のあたりまでを含む一帯の山々の地域」のことだろうとおもいます。その理由は、「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々の地域」が、比良明神を 地主神 として信仰していた場所としての、ひとつのまとまりをもった地域だとかんがえられるからです。

このことについて、池上洵一さんは、つぎのように述べておられます。

比良連山は最高峰の武奈ヶ岳でも標高一二四メートル、数字でみると高い山ではないが琵琶湖に面した東側は湖畔まで一気に薙ぎ落ちており、麓から見上げる山容には威圧感さえ漂う。堅田のあたりから比良の麓に洽って北上すると、もともと乏しかった湖畔の平地がますます狭くなり、ついには山脚がそのまま湖面に接するところに白鬚神社がある。旧高島郡(現高島市)鵜川の地で、湖中に立つ赤い大鳥居で知られる。これが現在もっともよく知られた比良の神であろう。〔中略〕

この神は、奈良の東大寺建立のときには良弁僧正の前に老翁となって現われ、現在の石山寺の地を譲って如意輪観音を祀らせたといい(石山寺縁起)、最澄が比叡山に根本中堂を建てたときには老人の姿で現われて、釈尊が成道して衆生を教化したときにはすでに老齢で参詣できなかつたと語ったといい(古事談)、琵琶湖が七度葦原に変じたのを見てきたほどの超老齢の翁で、仏教結界の地として釈尊に比叡山の地を譲ったとも伝

える(『曾我物語』、謡曲『自髭』など)。つまり、この神は比良山だけでなく比叡山やさらに南の石山付近まで含む一帯の山々の地主神として理解され、その化現は驚くべき長寿の老翁としてイメージされていたのである。(池上, 2008, p. 259)

このように、「比良山地をはじめとして、その南にある比叡山や、さらにその南にある石山(石山寺)のあたりまでも含む一帯の山々の地域」は、比良明神を地主神として信仰していた場所としての、ひとつのまとまりをもった地域なのだろうとおもいます。



図1 ^{ひらみょうじん}比良明神(岩に座して釣り糸を垂れる老翁)と ^{ろうべん}良弁僧正(『石山寺縁起』[部分])

「平野山」の地主神・比良明神としての酒天童子

『大江山絵詞』では、比良明神を地主神として信仰していた、そのひとまとまりの地域のことを、「比良明神の山(領地)」という意味で、「ひらのやま」(平野山)という言葉で表現し、酒天童子をその地域の地主神として設定しているのではないかとおもいます。つまり、『大江山絵詞』における酒天童子は、比良明神と同一の存在としてあつかわれているのだらうとおもいます。そのため、『大江山絵詞』における酒天童子は、「比叡山の地主神」というよりは、より広域の、「比良山地・比叡山地・石山^{いしやま}」の^{いしやま}「^{いしやま}比良明神^{いしやま}」の地主神(比良明神)としてあつかわれているのだらうとおもいます。

『大江山絵詞』のなかの「平野山」という言葉については、単純に、「平野山＝比叡山」とされることが多いように見受けられます。ですが、上記のようにかんがえると、比叡山は、あくまでも、「平野山」と呼ばれる地域（比良明神の領地（山）である、比良山地・比叡山地・石山の一帯の地域）のなかの一部にすぎないのだらうとおもいます。

なお、比良明神は、『曾我物語』の「比叡山のはじまりの事」の説話では、滋賀の浦のほとりで釣りをする老翁(白鬚大明神)として登場し、釈尊に比叡山の地を譲ったとされています。また、『古事談』第五のなかの「叡山中堂建立に蠣殻出現の事」の説話では、比叡山開創時に最澄と比良明神が会話をしている場面があります。さらに、比叡山延暦寺の^{みねみち}峯道(峰道)の途中には、^{にのみやちようすいいわ}二宮釣垂岩という岩があり、そこで「伝教大師が地主権現(小比叡明神)化現の老翁と出逢った」とされています(武, 2008, p. 325)。この二宮釣垂岩の説話は、おそらく、『石山寺縁起』の絵巻に描かれている、^{ろうべん}良弁と^{ひらみょうじん}比良明神の説話を模倣してつくられた説話ではないかとおもいます。

これらの一連の説話は、総括すると、「最澄や釈尊に象徴される天台教団は、比良明神(地主神)から比叡山の地を譲り受けたのであるから、天台教団にはその土地を領有する正当な権利がある」、ということを主張するための説話であるといえるでしょう。このことにもあらわれているように、おそらく、天台宗の教団は、比良明神に対する信仰を、自分たちの教団に対する信仰に置き換えていったのではないかとおもいます。そうした領地拡大のための動きのひとつとして、天台教団は、比良明神の信仰がある地域、つまり、「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々の地域」(「平野山」)を、自分たちの教団の領地であると主張しようとしたのではないかとおもいます。

『大江山絵詞』の説話のなかで、最澄が、比叡山ではなく、「平野山」(「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々」)の地域の地主神である酒天童子を追い出して、根本中堂を建てた、とされている理由は、ここにあるのだらうとおもいます。つまり、『大江山絵詞』の説話のなかにおいて、天台教団を象徴する存在である最澄が、地主神である酒天童子を追い出して、「平野山」(「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々」)の土地を手に入れた、ということを主張することで、暗に、「平野山」(「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々」)の地域の正当な領有権をもつのは天台教団である、ということを主張しようとしたのではないかとおもいます。

なお、この「平野山」の説話と同様の目的をもって、天台教団によってつくられたとおもわれる説

話としては、比良山地の地主神である 思古^{しこぶち}明神が、相^{そう}応^{おう}和^わ尚^{しょう}に土地を譲ったとされる説話があります。この説話についても、その背後には、天台教団が比良山地の地主神の領地の正当な領有権をもつのは自分たちの教団である、ということを主張するために説話をつくった、という事情があった可能性があります(村山, 1994, pp. 218-219)。

現代のわれわれには想像しにくいことですが、こうした説話は、当時の社会においては、ただの絵空事ではなく、一種の法的根拠のようなものとしてあつかわれることもあったようです。このことについて、濱中修さんは、つぎのように述べておられます。

物語の中でそのようなことを主張しても詮ない所業ではないかというのは近代人の発想である。例えば、先にも触れた『太平記』巻十八における叡山開闢説話は、足利将軍側近達の山門領没収の評定の場所において玄慧法印の反論として提示されているのである。中世の宗教者にとって、このような物語的〈神話〉は単なるお話であり得なかったのである。(濱中, 1990, p. 59)

ここまでお話してきたように、天台教団は、『大江山絵詞』の説話のなかで、「平野山」という言葉をつかうことで、暗に、自分たちの教団が、「比良山地から、比叡山地、石山のあたりまでを含む一帯の山々」(「平野山」)の地域の領有権をもっている、ということを主張しようとしたのではないかとおもいます。

「近江国かが山」が己高山である可能性について



図2 香取本『大江山絵詞』における比叡山追放後の酒天童子の移住の流れの推定図

『大江山絵詞』には、「近江国 ^{おうみのくに}かが ^{やま}山」という山が登場します。この山は、最澄の所有地であったとされ、比叡山を追い出された酒天童子が、移住先の土地を与えてくれるように最澄に求めたことで、酒天童子に与えられた土地です。この「近江国かが山」というのは、滋賀県の湖北地域にある ^{こだかみやま}己高山 のことではないかとおもいます。己高山が「近江国かが山」であるとかんがえる理由は、己高山がつぎの4つの条件を満たす場所だからです。

- ・条件1：白山信仰が盛んな場所である。
- ・条件2：最澄や天台宗にゆかりのある場所である。

- ・条件3: 経済的・軍事的に重要な場所(交通の要衝)である。
- ・条件4: 近江国の鬼門とされる場所である。

条件1: 白山信仰が盛んな場所である

おそらく、「近江国^{おうみのくに}かが山^{やま}」という名称は、「近江国にある白山信仰の盛んな山」のことを、「加賀国^{かがのくに}の白山(はくさん)」「(加賀山(かが山))」に見立てて、「近江国かが山」「(近江国加賀山)」と呼んだのではないかとおもいます。「かが」(加賀国(現在の石川県南部))にある山のなかで、代表的な山といえば白山です。ですので、「かが山」(加賀山)というのは、「加賀国の山」、つまり、白山のことを指しているのだらうとおもいます。

これとおなじような例としては、たとえば、「近江国にある富士山のような山」という意味で、「三上山」のことを「近江富士」と呼ぶことがあったり、「都にある富士山のような山」という意味で、「比叡山」のことを「都の不二」(都のふじ)と呼ぶことがあったり、「尾張国にある富士山のような山」という意味で、「尾張富士」と呼ばれている山があったりします。このように、「〇〇にある富士山のような山」という意味で、各地の山々のことを「〇〇富士」と呼ぶことがあります。それとおなじように、「近江国かが山」(近江国加賀山)という言葉も、「近江国にある加賀山(白山)のような山」という意味の言葉なのではないかとおもいます。

高橋昌明さんは、『酒吞童子の誕生』のなかで、『大江山絵詞』のなかに登場する「近江国かが山」という言葉の表記を、「近江加賀山」と表記されています(高橋, 2005, p. 100)。おそらく、高橋昌明さんも、「近江国かが山」という言葉のなかの「かが山」という言葉は「加賀山」のことを意味している、と考えておられるのだらうとおもいます。

己高山^{こだかみやま}は、白山信仰がさかんな場所だったようです。なぜなら、己高山は、加賀の白山を開山したとされる泰澄にゆかりがあるとされている場所だからです。応永十四年(1407)に、「天台陰土穴太末資金剛仏子法眼春全」によって編纂された『己高山縁起』では、「行基が勝地としてこの峰を選び、伽藍を草創して仏像を彫刻し、泰澄が聖跡としてこの山を崇め、峰に入って行門を建立した」(秀平, 2005, p. 52)とされています。また、『興福寺官務牒疏^{こうふくじかんむちようそ}』という文献には、「己高山五箇寺」と呼ばれる寺院についての記述があり、それらの寺院の開基には、行基や泰澄の関与が記されています(秀平, 2005, p. 52)。大東俊一さんは、「泰澄の名があるように、己高山の信仰世界を考える上で、白山信仰からの影響を無視することはできないであろう」(大東, 2016, p. 63)と述べておられます。また、『己高山縁起』には、最澄が白山白翁に依頼されて、己高山の寺院を再興したという話が記されています。

このように、己高山^{こだかみやま}は、白山信仰がさかんな場所だったようです。ですので、己高山は、「近江国にある白山信仰の盛んな山」であり、「加賀国^{かがのくに}の白山(はくさん)」「(加賀山(かが山))」に見立てられて、「近江国にある加賀山(白山)のような山」という意味で、「近江国^{おうみのくに}かが山^{やま}」(近江国加賀山)と呼ばれたのではないかとおもいます。

条件2: 最澄や天台宗にゆかりのある場所である

『大江山絵詞』の酒天童子の昔語りでは、「近江国^{おうみのくに}かが山^{やま}」は、最澄の私領であったとされています。これは、おそらく、「近江国かが山」と呼ばれる場所が、最澄や天台宗にゆかりのある場所であるか、あるいは、天台教団の領地である、ということの意味しているのだろうとおもいます。

己高山^{こだかみやま}は、最澄や天台宗にゆかりのある場所です。『己高山縁起』には、己高山の寺院が最澄によって再興されたとする、つぎのような記述があります。

最澄が己高山南麓の高尾の草堂で修行中に、仏閣の礎石跡で十一面観音の頭部を発見した。すると白山白翁が現れて、二〇〇年前に仏閣を建てたが焼失してしまい、復興してくれる人が来るのを待っていたという。最澄は、霊木を^{みそぎ}御衣木加持して、その仏頭に続く胴体部を自ら彫刻した。そして白山白翁の指示を受け、己高山の鎮守として^{じゅっしょごんげん}十所権現を勧請したという。(秀平, 2005, p. 52)

このように、最澄は、己高山の寺院を再興して、白山白翁という神から己高山の領有権を譲り受けたとされています。大東俊一さんは、こうした『己高山縁起』の記述と天台宗のつながりについて、つぎのように述べておられます。

この縁起は、編者の春全が自ら「天台陰士穴太末資金剛仏子法眼春全」と記していることや、開基の行基や泰澄よりも、再興した最澄の逸話に多くの紙幅を割いていることからわかるように、天台宗の色合いが濃く表われており、平安中期以降、己高山の諸寺院は天台宗系となっていく。(大東, 2016, p. 69)

なお、白山信仰は、天台宗の修験道とのかかわりがあったようです。江戸時代中期の文献である、『山門堂社由緒記』の「無動寺」の項目(『天台宗全書 第24巻』, p. 264)や、『東塔五谷堂舎並各坊世譜』の「無動寺」の項目(『天台宗全書 第24巻』, p. 98)のなかには、比叡山延暦寺の無動寺谷に、白山権現を祀った白山社があったことが記されています。なお、現在でも、無動寺谷の本堂である明王堂のすぐ横には、^{まろうどのみや}客人宮(白山社)があります。このように、天台修験が白山信仰と関係があったことが、酒吞童子説話のなかに、白山信仰が盛んな場所である己高山(近江国かが山)が挿入されることになったことの理由のひとつなのかもしれません。

このように、己高山^{こだかみやま}は、最澄や天台宗とも関わりがある場所です。ですので、『大江山絵詞』の酒天童子の昔語りのなかで、最澄の私領であったとされている「近江国^{おうみのくに}かが山^{やま}」は、己高山である可能性があるのではないかとおもいます。

条件3: 経済的・軍事的に重要な場所(交通の要衝)である

『大江山絵詞』の酒天童子の昔語りでは、「桓武天皇が^{おうみのくに}近江国^{かが} ^{やま}山から酒天童子を追い出した」、とされています。これは、おそらく、「^{おうみのくに}近江国^{かが} ^{やま}山」と呼ばれる場所が、経済的・軍事的に重要な場所(交通の要衝)であったということを意味しているのではないかとおもいます。「近江国かが山」と呼ばれる場所が、交通の要衝であったからこそ、国政を司る桓武天皇としては、そのような重要な場所に、酒天童子のような悪鬼をのさばらせておくことができず、「近江国かが山」から酒天童子を追放した、というのが、『大江山絵詞』の物語の設定なのではないかとおもいます。

もし、天台教団が、『大江山絵詞』の説話のなかに、この桓武天皇についての話を挿入したのだとすると、その動機は、自分たちの教団の領地である「近江国かが山」という場所が、「国政を司る桓武天皇が気にかけるほど、重要な場所である」ということを、喧伝するためだったのかもしれない。

^{こだかみやま}己高山がある滋賀県^{きのもと}木之本町や、その周辺の、高月町、余呉町、西浅井町などの、かつての^{いかぐん}伊香郡の地域は、古代から北陸道との交通の要衝でした(『日本歴史地名大系 第25巻』, p. 1005)。また、^{ほっこくかいどう}北国街道の^{ほっこくわきおうかん}木之本宿(現在の長浜市木之本町木之本)と中山道の関ヶ原宿を結ぶ^{ほっこくわきおうかん}北国脇往還の街道は、街道の途中で小谷城がある小谷山の麓をとおっていることや、1600年の関ヶ原の戦いにおいて西軍の敗走路となったことなどから、軍事的な要衝でもあったようです(『日本歴史地名大系 第25巻』, p. 59)。

このように、^{こだかみやま}己高山やその周辺地域は、経済的・軍事的に重要な場所(交通の要衝)です。ですので、^{こだかみやま}己高山は、「^{おうみのくに}近江国^{かが} ^{やま}山」の条件に合致する場所であると言えるだろうとおもいます。

条件4: 近江国の鬼門とされる場所である

『己高山縁起』は、古老の言い伝えでは、^{こだかみやま}己高山は近江国の鬼門であるとされている、としています(秀平, 2005, p. 52)。「鬼門であること」(北東の方角に位置すること)は、「^{おうみのくに}近江国^{かが} ^{やま}山」の候補地としての必須条件ではありません。ですが、「^{おうみのくに}近江国^{かが} ^{やま}山」を、^{こだかみやま}己高山(近江国の鬼門)だと仮定すると、酒天童子の移住の流れが、「鬼門から鬼門への移動」という流れになります。つまり、京都の鬼門である比叡山から追い出された酒天童子が、その次にあてがわれた移住先が、近江国の鬼門である^{こだかみやま}己高山であった、ということです。

牧野和夫さんは、「叡山における諸領域の交点・酒吞童子譚：中世聖徳太子伝の裾野」という論文のなかで、中世の天台教団によってつくられた叡山開闢譚のひとつとして、「白猿が、インドの^{うしとら}霊鷲山の^{かど}良の角をともなつて、中国の天台山へ飛来し、そこからさらに、天台山の^{うしとら}良の角

をともって、日本の比叡山に飛来した」というような主旨の説話があることを紹介されています（牧野, 1990, p. 82-84）。この「^{うしろ}長^{かど}の角」という記述は、鬼門（北東の方角）の概念との関連をかんじさせます。また、この、霊鷲山から天台山へ、天台山から比叡山へ、という飛来の流れ（仏法（天台宗）の領地拡大の流れ）を、地図上で確認すると、それらの移動の方向は、おおまかに言って、どちらも北東の方角への移動だといえるのではないかとおもいます。さらに、ここで、天台教団の領地が、比叡山から己高山へと拡大したことによって、酒天童子が比叡山から追いやられて、己高山へ移住することになったと仮定してみます。すると、比叡山から己高山への移動も、北東の方角への移動になります。このようにかんがえと、酒天童子が、比叡山を追いついて移住した先の土地が、比叡山の北東の方角にある己高山であることに、必然性がでてくるのではないかとおもいます。天台教団は、このように、霊鷲山から天台山（鬼門（北東の方角））へ、天台山から比叡山（鬼門（北東の方角））へ、という仏法（天台宗）の領地拡大の流れを踏襲することで、比叡山から己高山（鬼門（北東の方角））へ、という天台教団の領地拡大の流れには必然性がある、ということを目指しようとしたのかもしれませんが。

このようにかんがえと、酒天童子の移住先の「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」は、近江国の鬼門である^{こだかみやま}己高山である可能性がある、ということが言えるのではないかとおもいます。

おわりに

ここまで、^{かとりぼん}香取本『^{おおいやま}大江山絵詞』の絵巻物に記されている、「^{ひらのやま}平野山」という地名と、「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」という地名について、下記の仮説を述べてきました。

- ・仮説 1 『大江山絵詞』における「^{ひらのやま}平野山」とは、「^{いしやま}比良山地・^{いしやま}比叡山地・^{いしやま}石山（^{いしやま}石山寺）の「^{ひらのやま}平野山」のことであり、酒天童子はその一帯の地主神である^{ひらみょうじん}比良明神としてあつかわれている。
- ・仮説 2 『大江山絵詞』における「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」とは、^{こだかみやま}己高山のことである。
- ・仮説 3 天台教団は、自分たちが「^{ひらのやま}平野山」と「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」の土地を領有する正当な権利をもっている、ということを主張するための根拠として利用するために、『大江山絵詞』のなかに「^{ひらのやま}平野山」と「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」という言葉をさし入れた。

どうしても、仮定にもとづいた推測が多くなってしまっていますが、なにかのご参考になれば幸いです。また、「^{おうみのくに}近江国^{やま}かが山」の候補地としては、^{こだかみやま}己高山以外にも、伊吹山や、比良山系の権現山なども可能性があるとかんがえているのですが、それらについてお話するには紙面が足りません。ですので、それらのお話については、またのちほど、ぼくのブログに追記させていただくかたちで、おつたえできればとおもいます。（※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。 <https://wisdommingle.com/?p=21616> ）

引用文献・参考文献

天野文雄（1979）「酒天童子」考，『能：研究と評論』，8.

池上洵一（2008）『池上洵一著作集 第3巻：今昔・三国伝記の世界』，和泉書院.

岩崎武夫（1978）『さんせう太夫考 続：説経浄瑠璃の世界』，平凡社選書，平凡社.

慶政〔著〕，木下資一 校注（1993）『比良山古人霊託』，佐竹昭広〔ほか〕編，『新日本古典文学大系 40』，岩波書店.

菊地勇次郎（1980）「最澄と酒吞童子の物語」，天台学会 編，『伝教大師研究』，早稲田大学出版部.

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 編（2005）『中世聖徳太子伝集成 第2巻』，斯道文庫古典叢刊，勉誠出版.

大東俊一（2016）『奥琵琶湖「観音の里」の歴史：近江・湖北の精神風土』，彩流社.

高橋昌明（2005）『酒吞童子の誕生：もうひとつの日本文化』，中公文庫，中央公論新社.

武覚超（2008）『比叡山諸堂史の研究』，法藏館.

濱中修（1990）「『伊吹童子』考：叡山開創譚の視点より」，『沖縄国際大学文学部紀要. 国文学篇』，19(1).

秀平文忠（2005）「第3章 山林修行と観音の山：己高山」，市立長浜城歴史博物館（企画・編集），『近江湖北の山岳信仰』，市立長浜城歴史博物館.

牧野和夫（1988）「「幽王始めて是を開く」ということ：天台三大部注釈書と「源平盛衰記」の一話をめぐる覚書」，『実践国文学』，34.

牧野和夫（1990）「叡山における諸領域の交点・酒吞童子譚：中世聖徳太子伝の裾野」，『国語と国文学』，67(11).

牧野和夫（1993）「中世聖徳太子伝と説話：「律」と太子秘事・口伝・「天狗説話」」，本田義憲
[ほか]編，『説話の講座 第3巻』，勉誠社。

村山修一（1994）『比叡山史：闘いと祈りの聖域』，東京美術。

『山門堂社由緒記』，天台宗典刊行会 編，（1974），『天台宗全書 第24巻』，第一書房。

『東塔五穀堂舎並各坊世譜』，天台宗典刊行会 編，（1974），『天台宗全書 第24巻』，第一書房。

（1991）『日本歴史地名大系 第25巻（滋賀県の地名）』，平凡社。

コトバンク，「世界大百科事典 第2版の解説」，「比叡山（ひえいざん）とは」，
<https://kotobank.jp/word/%E6%AF%94%E5%8F%A1%E5%B1%B1-118873>，2019年6月11日閲覧。

絵図の出典

図1 「石山寺縁起．[1]」，国立国会図書館デジタルコレクション，コマ番号 10，
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2589669/10>，（著作権保護期間満了）。

図2 倉田幸暢（2019）「香取本『大江山絵詞』における比叡山追放後の酒天童子の移住の流れ
の推定図」。

図2 地図の出典：国土地理院「地理院地図」，地理院タイル「全国ランドサットモザイク画像」を加
工・編集して使用しています。地理院タイル「全国ランドサットモザイク画像」のデータソース：
Landsat8 画像（GSI, TSIC, GEO Grid/AIST），Landsat8 画像（courtesy of the U.S. Geological
Survey），海底地形（GEBCO）。地理院タイル一覧ページ：
<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>。